使徒言行録 17 章 22－31 節

「アイドルからの解放」

パウロの伝道はアジアを超え、今はアテネにいます。アテネは「偶像にあふれた迷信の町でもあった（16）」とあります。町中に、ゼウスやアポロ等の神々の像があふれていました。アテネには 3000 を超える神殿や宗教施設があったと言われています。日本人の信仰の形はアテネとそっくりです。そこでパウロは語り始めます。「あなた方は誰を拝むかを知らずに拝んでいる。あなた方が拝んでいる神がどなたなのかを知らせましょう」と（23）。彼の話を熱心に聞いていた人たちは、話が主イエスの十字架と復活になると、ある者はあざ笑い、別の者は「その話はいずれまた聞かせてもらおう」と言いました（32）。

アテネは「人の数より偶像の数が多い」といわれたほど、偶像に満ちていました。日本でも八百万と呼ばれるほど、多くの神々が祀られています。それは、人間は自分の欲する存在を神とするからです。人は自分たちの願いを託して神を造り、また祟りを恐れて「知られざる神々の像」まで作り、拝みます。自分を超えた、人間にはどうしようも無い世界があることを、人は本能的に知っており、怖れています。そのために頼るもの、神に代わるものを崇拝するのです。偶像崇拝は人間の不安の象徴です。この世界は不条理であることを知るゆえに、多くの人はその不条理を克服する「真実の神」を求めています。そのような人々に教会は何を提示することが出来るのでしょうか。

「十字架と復活の言葉」は、どの時代、どの国においても嘲笑と拒否を招きます。それにもかかわらず、教会はこの福音を語り続けます。真理には客観的真理と実存的真理があります。客観的真理とは、科学的・実証的真理です。人間は死ぬ、という客観的真理。それに対して実存的真理とは、例えば「神が私たちを創造された」等の主観的な真理です。それは証明できません。信じるか、信じないかの事柄です。しかし信じた時、それは真理となり、人を生かします。そのような真理があることを教会は語り続けます。この実存的真理をあざ笑い、「いずれまた聞かせてもらおう」と言う時、そこからは何も生まれません。生まれないどころか、偶像の神々にすがって生きる生き方しか出来ません。それは非日常を怖れて暮らす日々です。復活を信じる、信じないは自由です。愚かな話と否認しても良い。しかし、否認しても、そこからは何も生まれない。しかし、復活の意味を求め始め、死とは何か、人は死からどのようにすれば解放されるのかを考え始めた時、そこに何かが生まれます。イエスは復活された。それは私たちが怖れる非日常や不条理を打破する出来事です。イエスを通して、私たちは非日常の恐怖から解放されます。アイドル・偶像から解放され、神の前に悔い改め、真理を求めて生きたいと願います。